

戦時下の文学 △その六▽

安 永 武 人

四 文学の転向（つづき）

Ⅲ 島木健作のばあい

1

一九二八（昭和三）年、左翼運動のかどで検挙・起訴された共產黨員・島木健作は、その十月、懲役五年の一審判決をうけたが、翌年、控訴審公判廷で転向を声明し、一九三〇（昭和五）年、刑期三年の有罪確定、一九三二（昭和七）年三月、仮釈放されて出獄した。その間、下獄いぜんからの胸部疾患の再発や神経衰弱、心悸亢進などのあらたな病気にも苦しめられ、一時は発狂の恐怖にさええなやまされたという^②。ただ転向強制の実情について、

佐野、鍋山の転向のころは、思想的にマルクス主義でも実践活動

から脱落することによつて転向は認められた。しかし日中戦争開始後の段階では、思想そのものの放棄しか転向と認められない。思想をもつこと自体悪とみなされた。^③

といわれている日中戦争をさかいとする質的な相違も念頭においていなければならぬ。もちろん、官憲のがわからずれば、実践活動の停止だけで転向とみとめる段階においても、思想放棄を宣言すればおおいに歓迎したであろうし、その段階でも組織における地位によつては、実践ばかりでなく思想放棄まで強要したばあいがあつたであろう。島木のばあいは、実践活動からの離脱を意味したのであって、思想放棄ではなかつたところに、一九三四（昭和九）年から開始される創作活動の源動力がこつていたといえるし、それだけにまた実践と理論とが矛盾している自己を告発せざるをえない苦悩がいっそう強烈にかれをおそうことにもなったのである。

そういうかれが、どうして創作という芸術世界に足をふみいれる

ことになったのか。かれみずからのことばを聞こう。

三二年に出所し、(中略)私は身体がわるく気も萎えてゐたが、少しづつ元気を回復し、可能な程度で農民のための仕事に身を近づけようと準備する迄になつてゐたが、そのとたん私は又病気で倒れた。三三年の十二月のことである。復活しようとする矢先であつたので手ひどい痛手だつた。そこへ共産党のリンチ事件といふものが報道されたりしてこれの衝撃も大きかつた。私は暗澹たる気持になり、死ぬかも知れないといふおそれもあり、色々複雑な思ひが去来して、^{つゞ}すると急に長い長い間忘れてゐた文学的な表現で何か書いて見たいといふ欲求が抑へがたい強さで湧いて来た。^④

と語っているが、なにか突如として創作へむかつたもののようにもうけとられる、さりげないいいかたであるために、「島木にとって病気は」「今度は農民運動家でなく、農民作家として世に打つて出る決意への契機となつた」という解釈もでてくるのである。が、もっと問題は深刻であつたのではなからうか。波川驍あての書簡に「あなたの評論をよんでゐると仕事への快い刺激をあたへられてゐる。何も書けぬ時ではあつても快い興奮を感じるのがつねでした」とあるような外部からの「刺激」もさることながら、もっと根本的な問題として、

私は私のたどたどしい人生の歩みのある時期において、転向といふ抜きさしならぬ問題に逢着した。私は肉体の上にも精神の上にもいやすことのできぬ傷を負ふた。(中略)生きながら死ぬべきであつたかも知れない。しかし私は若く、私はなんとかして生きなかつた。このまゝ滅びるといふことには堪へ得なかつた。新しく生きる道を求めようとあがく姿が転向といふ形をとらねばならなかつたのである。半ばは偶然に、半ばは自己の本質にもとづく必然から文学につかみかかつたが、その文学といふのも私にあつては、転向問題を考へる一つの場としての意味を持たざるを得なかつた。私の文学が、人にとつても自分にとつても、アマミュージィングなものではあり得ぬといふ性質は、最初から運命づけられてゐたのであつた。^⑤

というかれ自身の述懐に注目したい。つまり、自己の転向体験とそれにまつわるさまざまの想念や感情を文学によって客体化し、徹底的にその人間的意味をきわめつくそうというのが、かれの文学へむかつたときの念願であつたとみることが出来る。自己の転向にこだわりつづけ、その敗北の意味を追尋し、自己再建の方途を発見しようといふかれの姿勢に、求道者の面影をみることはたやすいであらう。が、それはもつとかれの内面にそくしていえば、転向をよぎなくさせる当時の日本の現実には、いちどは屈服しながら、そのまま

「生きながら死ぬ」を道をえらばず、やはりその現実にかかりあひながら「新しく生きる道」——つまり閉塞的現実のなかにおいて、自己内面の可能性の検証へとむかうほかはなかったのだ。そこに少年期の文学愛好の傾向が再生したというだけではなく、文学へむかわざるをえなかった必然性があったのである。第一創作集『獄』^⑤所収の諸篇執筆の前年、自筆年譜につきのような執筆にいたる経過が書かれている。

昭和八年。意志的に自分を訓練することと、過去の自分の足跡について考へることとの両方の目的から、「日本農民運動史」を書かうとして、資料集めにかかった。／やや準備成つて、書きにかかったが転向問題が根柢にあり、それにひつかかつて幾らも書きすすむことができなかった。／ふたたび何等かの形で農民のなかで生活し、自ら行ふことによつて問題の解決の道を知るほか方法はないといふ思ひが強くなつて行つた。／(中略)十二月、激烈な流行性感冒のために倒る。宿痾再発のけはひあり。ひそかに希望しつつあつた新しい生活もおぼつかないと思ひ知つた。病中多くの思ひあり。漸く起き上れるやうになるのを待つて、獄中生活中のある部分を小説風に綴るため机に向つた。^⑥

ここで注意したいのは、「農民のなかで生活し、自ら行ふことによつて問題の解決の道を知る」という一節である。いったん実践運動

からの離脱ということで転向を認められた島木が、転向後四年の年月のあいだに、ふたたび治安維持法違反に問われる危険性のある農民運動の実践を志向しはじめたということは、危険をおかしても、できるだけ非転向に近い立場に自己をおこうと決意したことをものがたっていないだろうか。しかし「日本農民運動史」が自己の転向体験のゆえに頓挫し、再び志向した実践活動——非転向への近接が病氣のために不可能になつたとすれば、それ以後のかれの苦悩の深刻さは、はかりしれないものがあつたにちがいない。その具体的実質は、『獄』所収の諸篇を検討することであきらかになるはずである。

「癩」は、獄中で咯血した太田二郎が、癩と肺の患者だけを収容する隔離病舎に移されるところからはじまる。「社会から隔離されてゐる世界」で孤独の病身をやしなわねばならぬ太田には、そのうえ点検のたびに自己の存在を番号でこたえねばならぬことの「忘れはならぬ屈辱の思ひが今更のやうにひしひしと身うち徹して感ぜられ」るうしろめたい過去がつきまとつてゐる。そして夜半ともなればげしい心悸亢進の発作になやまされる。

若い共産主義者としての太田の心に、いつしか自分でも捕捉に苦

しむ得体の知れない暗いかげがきざし、その不安が次第に大きなものとなり、確信に満ちてゐた心に動揺の生じ来つたことを自分自ら自覚はじめ、そのために苦しみはじめた頃から、彼は上述の発作に悩むやうになつたのであつた。

という自覚がある。それは、かれが「従来確信をもつて守り来つた思想が、何らかのそれに反対の理論に屈服して崩れかかつて来た」という動揺ではなく、

共産主義者としての彼はまだ若く、その上にはばインテリにすぎなかつたから、實際生活の苦汁をなめつくし、その真只中から自分の確信を鍛へ上げた、といふほどのものではなかつた。ふだんは結構それでいいのだが、一度たとへやうもない複雑な、そして冷酷な人生の苦味につき当ると、自分の抱いてゐた思想は全く無力なものになり終り、現実の重圧に只押しつぶされさうな哀れな自己をのみ感じてくるのである。苛酷な現実の前に闘ひの意力をさへ失ひ、へなへたと崩折れて了ひ——自分が今までその上に立つてゐた知識なり信念なりが、少しも自分の血肉に溶け合つてゐない、ふわふわ浮き上つたものであつたことを鋭く自覚するやうになるのである。

隔絶された病棟に癩患者たちと同居し、かれらとときおり言葉をかわし、かれらの絶望的な心身の状況にふれ、死の恐怖をともしやう肺

疾患のわが身の現状におもひたつたとき、太田は「理論の理論としての正しさには従来どほりの確信を持ちながらも、しかもその理論どほりには動いて行けない自分」を自覚しないわけにはゆかない。この自覚のゆえに、この段階におけるかれを非転向ととらえる従来⑤の解釈、たとえば「動揺を感じつつも転向はしていない主人公」とみるのはどうであろうか。前述したように日中事変を境界として、それ以前は実践の放棄をもって官憲は転向と認めたのであつた。この太田はその転向を経過していて、なおかつ思想放棄にはいたつていなかったとみるべきではないか。でなければさきに引用した点呼にあつた「身うち徹して感ぜられ」る「忘れてはならぬ屈辱」の痛切さが理解されなくなるであろう。ここには孤独地獄のなかで、いままで抱懐してきた理論が、人間の生死という個人的な問題にさえ、まったくなにもこたえてくれないこと、それとともにその理論獲得の過程が、実生活の苦闘のなかで「鍛へ上げ」たものではないことへの反省がある。が、「闘争を回避し、苦しい現実の中から、ただひたすらに逃げ出すことはかりを考へてゐる」自分の資質についての懐疑、共産主義者失格の不安と悲しみがそれらの根底によこたわつてみるとみることができよう。

こういう状況にあるとき太田は、あらたな癩患者をこの病棟にむかえる。どこか人もなげにふるまっている落着きはらつたその男の

態度は、ちょっとふつうの服役者たちがう印象をあたえて太田の注意をひくが、やがてその顔容のくすれかかった男が、かつての同志・岡田良造であることを知る。岡田は太田が「精鋭な理論とその理論の心憎いまでの実践との融合」した典型的指導者として接した同志であった。「なんとという素晴らしい奴が日本にも出て来たもんだ！」と感動させられた人物である。が、

今日自分自身が全くの廢人である事を自覚してゐる筈の彼は、どんな気持を持ち続けてゐるであらうか、共產主義者としてのみ生き甲斐を感じ又生きて来た彼は、今日でもなほその主義に対する信奉を失つてゐないであらうか、それとも宗教の前に屈伏してしまつたであらうか、彼は自殺を考へなかつたであらうか？

太田はわが身の過去の体験から、岡田の現在にあれこれ想像をめぐらしていたが、運動時間を利用してようやくつかんだ機会に話しあつてみると、岡田はすでに太田に気づいていたという。そして岡田が七年の刑をくつてゐることを知らされて、それは「岡田が転向を肯じなかつたこと、彼が敵の前に屈伏しなかつた」からだと理解する。ここにも転向した太田の、非転向者岡田への畏敬とうしろめたさをよみとることができる。そして後日の会話のとき、太田の問いに、

只これだけのことははつきりと今でも君に言へる。僕は身体が半

分腐つて来た今でも決して昔の考へをすててゐないよ。それは決して瘠せ我慢ではなく、又、何か強制された気持で無理にさう考へてゐるでもないんだ。(中略)僕のはきはめて自然にさうなんだ。さうでなければ一日だつて今の僕が生きて行けない事は君にもよくわかるだらう。……それから僕は、どんなことになつても決して、監獄で首を縊つたりはしないよ。自分で自分の身体の始末の出来る限りは生きて行くつもりだ。

と答えた岡田は、その後病気がおもくなつたらしく運動時間にもあらわれなくなつてしまつた。太田も結核菌に腸をおかされはじめ、「暗い死の影」をみつめるようになる。太田は自分の「深い諦めに似た心持」のなかで「岡田にあつては彼の奉じた思想が、彼の温い血潮のなかに溶けこみ、彼のいのちと一つになり、脈々として生きてゐる」のを確認し、「言葉でははつきり言ひ現しがたい深い精神的な感動」にひたるのである。それは自分のばあい、思想が「血肉に溶け合つてゐない」状況をいやおうなく自認しなければならなかつたために、よけいに「畏敬すべき存在」岡田への感動は強烈であつた。しかし、この作品における太田と岡田との関係は、思想をおなじくし運動をともにしながら、二つの異つた道を辿つた結果、太田は岡田によつてその弱点を摘発されるかたちになつてゐる。太田には島木自身の体験がおもくかさねあわされているにちがいない。そ

れだけに太田にとって岡田が「理想的人間像」^⑩であったことはたしかである。島木にとってもおそらく転向のうしろめたい心理のなかで、かろうじてつくりあげた、かくもありがたかった、ひよっとするところありえたはずの、自己の対極にたつ人物が岡田であったということができよう。しかし、それにとどまらないで、転向者・太田は非転向者・岡田によって裁かれる立場にたたされていたこともたしかである。それによって島木には、自己の過去をみずから裁くという意図があったのかもしれない。だから、読者によっては岡田の不屈剛毅な生き方に感動するかもしれないが、それ以上に病い篤く刑の執行停止命令によって担架にのせられて獄をでる太田の哀れな敗残の姿のほうがつよく胸をうつのだ。岡田は実在の非転向者宮井進一がモデルとされているが、観念的にしか描かれていないために、太田のみじめな姿によりつよいリアリティがある。それだけに出獄した太田の前途には、いっそう苛烈な内面のたたかいが予想され、読むものをいっそう暗然とさせる。この時代の理不尽な権力による弾圧が、人間の内面にまでもふみこんで、その人間性を蹂躪するさまざまな、ありありとみることができるところである。

「盲目」の古賀は、獄中の浴槽で顔を洗ったばかりに、病菌によって一夜にして失明するという不幸にみまわれるが、これは「保釈出所」の条件とされていた思想放棄の宣言をかろうじて拒みつづけ

る人物として描かれている。この古賀は、心理的には「癩」における太田にちかいが、かろうじて岡田の立場を固守することができている。しかし、それは岡田が自己の思想にたいする不動の確信によってささえられているのとはあきらかにちがう。

昂然と眉をあげておごり高ぶつてゐた過去の自分といふものはみちんにくだけてとび、自分が今までその上に安んじて立つてゐた地盤ががらりと音を立てて崩れてゆくことを自覚せずにはゐられなかつた。(中略)だがさうかといつて、苦しまぎれになんらかの観念的な人生観といふものを頭のなかにつくりあげ、そこに無理に安住しようとしたところでそんなことができる筈のものではない。(中略)捨小舟が流れのまゝに身を任せてゐるやうにすべてを自然のまゝに任せきり、いづこへか自分を引ずつてゆく力に強ひて逆らうとはせずそのまゝ従ふといふ態度であつた。なるやうになるさ、とすべてを投げ出した放膽な心構へであつたともいへる。(中略)しかし、古賀はひとまづそこに落着きはしなから、心の奥ではそこが畢竟一時の腰かけにすぎないといふ気持ちを絶えず持つてゐた。理論的に問題を解決してゐない弱味をはつきり自覚してゐたからである。いはば、それははげしい打撃にうちひしがれた彼の感情がずるずるべつたりと到達した場所にすぎなかつた。

このような「心構へ」に到達するまでの内面は、思想を信奉しながら、その思想の命ずる活動がまったく封じられてしまう獄中であって、両者の不統一がもたらす苦悩におおわれたものであったといえよう。「今後の自分はどうしたものであらう、どういふ考への上に心を据ゑて生きていつたものであらう」という自問の結果、到達した心境であるが、それが刑期満了までのいちおうの安定にみえながら、それでもなお確固とした安定になりえていないのは、刑期中に思想そのものの動揺がくるのではないかとという不安——その底流には、刑期をおえて獄外にでたときには、組織は崩壊し、大衆からは孤立無援となり、そのような思想が通用するどころか、まったく様相を異にした社会になっているのではないかという危惧からくる不安——が、たえず古賀の心理のひだににじみでてきているのを、みのがすわけにはゆかない。が、しかし古賀は、

失明した今の自分は自分たちの運動から見れば一箇の廢兵であるにすぎない。しかし、それは、自分が今まで抱いてゐた思想を抛棄しなければならぬといふ理由にはならず、いはんや従来考へが間違ひであつたといふことを宣言しなければならぬといふ理由にはならないのである。

とおもいさだめて、控訴審の直前にいたって「保釈出所」という抗しがたい誘惑をけて、思想放棄の拒否を決意したのだ。島木は

「癩」における太田・岡田の關係の創造から一歩さがって、古賀ひとりの内面の問題にいよいよ追いつめられ、かろうじて自己の思想をまもっているくらしい状況を描くことで——それも自己内部への省察とそのことをとおして自己再生の道を模索するところまで、転向体験の追求をすすめざるをえなくなってきたのである。ここにはあきらかに「癩」と「盲目」とのちがいがみられる。もはや「盲目」では、「癩」の岡田におけるような状況にたいする剛毅不屈の挑戦的姿勢は影をひそめ、かろうじて従来の思想的立場をまもるといふ消極的な防禦姿勢にうつりかわっていることを認めないわけにはゆかないであらう。自己の転向体験をそれにそくしてそのまま再現する私小説の方法によらず、岡田、古賀を設定し創造することによって虚構を必然とした島木の、ほかの傷心風の「鎮魂歌^④」をうたった転向作家との方法上のちがいを提示しえた点は評価すべきであらうが、かれの転向体験が、獄中・癩・盲目という条件をもつ極限状況において客体化されたところに、問題があつたといわなければならない。そういう極限状況は、島木の転向の本質や可能性を追求するのには有効であつたが、いっぽうでは思想放棄にいたるまでの過程を、やむをえなかつたものとして許容する条件として作用したこととも否めないのである。そこに島木の作為や自己弁護をみようとはおもわない。しかし、創作方法の弱点として、その設定の特殊性をみ

とめないわけにはゆかないのである。そのことはつぎの「苦悶」において立証される。

「苦悶」では、はじめて思想放棄を誓って転向をみとめられた人物・石田順吉が登場する。「彼が従来持ちつづけてきた政治的意見の再吟味」であり、「その政策のよつて立つ原則的思想の根本にまでふれ」た転向上申書であった。が、それはそれとしても、もっとかれの内心ふかく転向を誘導する原因としてはたらしかけたものとして、「個人的生活感情のうごき」があることを、かれ自身認めないわけにはゆかない。そうなつてゆく条件として、獄中孤独のためたい恐怖が作用していた。それだけに上申書をだしたあとの、「真底こみあげてくるたのしさ」はまぎれもない事実なのだ。「長年持ちつづけた自分の主義主張を裏切つてなんの心たのしいことがあらう」とおもいこもつとするのだが、そのたのしい解放感は消えないのだ。よく引用されるところだが、石田が「転向」の真因として最後に到達した自己認識は、つぎのような、まったく個人的な問題であった。

こゝでの生活が一と月二た月と長びくにつれて、それに正しく比例して、外部から石田につけ加へられてゐたいろんな装飾物がある——そして彼はそれを装飾物ではなく、自分の血肉の一部である——と今が今まで自負してゐたのであるが——つぎつぎに剝ぎとられ

てゆくのであつた。かうして一年足らず経たときに、石田はかつての社会生活の影響から完全に離脱した人間となつたかに見えてゐた。自分でもさう感じ、あらゆる社会的、階級的なものからまつたく分離し孤立した人間としておのれを見るのであつた。そしてさういふ自分こそ赤はだかな、真の人間石田順吉であり、今までの石田順吉はニセモノであつたと錯覚しはじめたのである。「血」が、——その先の先はつひに摸索すべくもない父祖の父祖以来の血が、個人的性格が、こゝにいたつて石田のうちに暴威をふるひ、人間を形づくり人間のあらゆる行動を支配する決定的なモメントはこれ以外にはないと思ひつめ、そしてそれはまた今さうどうすることもできぬものであると、石田が信じはじめたのは自然であらう。

「俺は弱い人間だ！はじめつからこんな運動に適するやうにつくられた人間ではなかつたんだ！」

「後天的な社会生活」の人間におよぼす影響は全面的に否定し、先天的な「血」が「人間を形づくり人間のあらゆる行動を支配する」と考えれば、その「血」ゆえに運動からの脱落は正当化され、ひいては自責の念からも解放される。「理論的把握が充分か不充分か、労働者かインテリか、などといふ区別によるのではなく、單純に肉体的精神的な耐久力の問題だ」と考える。こういう思考に石田を道

いとむのは、「今後何年かこのままの状態がつづくであらう生活をおそろおそろのぞき見」て「底知れぬ暗黒の洞窟をのぞきこむおそろしき」があるからなのだ。この恐怖感が、思想と感情・感覚を分離させ、後者に優勢をしめさせてしまうように作用しているといわねばならない。だから「物理的機能としての〈血〉が、思想的人間を生物学的人間に転化さす」とみることまでできるであろう。だが、石田がこういう思考の過程で「血」こそが「決定的なモメント」であるとすることによって、「組織のなかで、闘争の過程で鍛へられて強くなる、などとなんとそれはあまい考へ方であつたらう」というとき、ここではあらわではないが、翌年から執筆しはじめる『再建』の重要なモチーフとなった左翼組織の思想と行動への批判のきざしがめばえていることも看過してはなるまい。

このように自己納得して「転向」した石田であったが、同郷同窓で活動の同志であった佐伯雄三の死の真相を知って、深甚の衝撃をうける。佐伯が高校での運動で投獄され、刑期をおえて出獄したとき、「自分自身のことをつきつめて考へてみたい」「自分の素質や何かをね。どうも俺は政治家ではない、なれさうにない、神経があんまり弱すぎるんだ」という迷いを石田にうちあげたとき、石田は「仮借なき冷罵をあげせ」て一蹴している。その後佐伯は再投獄されるような道へあらためてすすみ、ついに、節をまげないまま獄中

に狂死したという。石田は佐伯に「弱きに徹して強きを得た」人間をかんじる。石田は「銀のごとき純情につらぬかれた佐伯雄三の全生涯」にうちのめされ、それを十字架としてせおって生きてゆかねばならなくなったのだ。

「癩」における太田と岡田との関係が、この作品では石田と佐伯のあいだに再生されている。ただ石田が思想放棄にふみきっているだけに、佐伯との対比は太田・岡田の関係にくらべて、よりいっそう沈鬱なやりきれなさはらむことになっている。したがって太田、古賀、石田と順をおって、そこに投影している島木の転向過程の追求の方向と問題意識をみると、岡田・佐伯というような非転向の理想像をかかげているのは、この段階においても、共産主義者として実践をふくむ理想的なあり方への憧憬をつよくいだき、いっぽうでは、わが身により近い太田・古賀・石田らの屈折あるいは屈折の可能性をたぶんにはらんだ人物像の抽出によって、みずからの古傷と自分ひとりではないと自慰する醜態までもあらかじめ仮借なく剔抉しようとする姿勢をもつものとみななければならない。このような非転向・転向のふたつの人物像の創造は、その対比による自己批判の徹底化という意味をもつとともに、一九三四（昭和九）年という時代状況のなかで、たとえ文学の世界であり、かつ観念的人物像というそしりはまぬかれないにしても、なお理想的共産主義者像

をつくりだすことによって、時代とのたたかいを放棄していない島木の姿勢をみとめなければならない。二年まえ林房雄が書いた『青年』の時代への屈服と比較すればあきらかである。このような理想像への憧憬と、ようやくめげえはじめた左翼組織の思想・行動への批判とは、とうぜんなんらかの方向で統一・整理されねばならないわけだが、それが翌一九三五（昭和十）年執筆開始の長篇『再建』によって、どのように展開したか、島木の自己再建の方向は注目にあたいする。

註

- ① 筑摩書房『現代日本文学大系』70の年譜による。
- ② 改造社『新日本文学全集』第十九巻の自筆年譜。
- ③ 家永三郎ほか『近代日本の争点』下（毎日新聞社）三二九頁。
- ④ 「文学的自叙伝」（創元社『島木健作全集』第十四巻）一七頁〜一八頁。以下『全集』というのはこれをさす。
- ⑤ 思想の科学研究会編『転向』上（平凡社）二二五頁。
- ⑥ 一九三四（昭和九）年二月十五日付。『全集』第十一巻）二七一頁。
- ⑦ 『生活の探求』について」（改造社『新日本文学全集』第一九巻）四八九頁。

- ⑧ 一九三四（昭和九）年ナウカ社版。「癩」「苦悶」「転落」「盲目」「医者」の五篇がおさめられている。なおこの版はかなり伏字がおおいのでテキストとしてはその比較的すくない『全集』第一巻をつかう。

⑨ 註②におなじ、五〇一頁。

⑩ 本多秋五『転向文学論』（未來社）一九九頁。ほかにも佐々木基一『昭和文学論』（和光社）七七頁に同様の見解がみえる。

⑪ 野村喬「癩」（東京堂『日本文学鑑賞辞典・近代篇』所収）

七一八頁。

⑫ 小笠原克『島木健作』（明治書院）五〇頁。

⑬ 宮本百合子『冬を越す蕾』（安芸書房）二二六頁。

⑭ 大久保典夫「獄と洞窟の思想」（審美社『転向と浪漫主義』所収）一一八頁。

2

『再建』は、一九三五（昭和十）年、『社会評論』に連載しはじめられ、中絶して、三七年、中央公論社から単行本として発行、ただちに発売禁止となった。この作品では、獄中ばかりでなく、ようやく獄外——四国K県の農村が、作品ぜんたいからすれば、かなりの比重で舞台として登場してくる。島木自身「作家としてなほ日の

浅い私の過去のほとんどすべてが打ち込まれてゐる筈だ」というように、この作品でも獄中はやはり転向・非転向の問題が中心主題である。「現実遊離の農民運動の反省と新しい道への模索である」とされる作品だが、やはりまだ島木は転向・非転向の問題から超越することはできないでいる。ただ『獄』における人物関係とのちがいは、非転向をつらぬく浅井信吉の眼をとおして、転向者・吉岡健治、動揺をひきおこす川合広志、毅然として節をまげぬ石上虎吉らがとらえられている点であろう。獄外の状況把握は一九二六（大正

十五）年における日農香川県連書記としての島木自身の体験が根底にあるとおもわれる。K県S郡の農村を背景に、四年まえに崩壊した農民組合の再建を企図して、かつての組合の指導者たち——山田

春乃、谷川、宮川、中村などが登場して、それぞれの立場から組合再建問題にとりくむ。そして、獄中・獄外をつなぐのは浅井信吉と山田春乃の内縁関係である。これまでの作品といちじるしくちがうのは、積極的に時代背景を描きだそうとしている点であろう。一九三二（昭和七）年から三四年までが作品の中心になる時期だが、回想としては一九二八（昭和三）年以降を主としながら、一九二二

（大正十一）年までさかのぼり、第一回・第二回普通選挙、三・一五大検挙、いわゆる満州事変勃発、蔵相井上準之助暗殺、五・一五事件、佐野・鍋山転向声明、三陸津波、皇太子誕生など、十五年戦

争開始前後の緊迫した時代雰囲気が農村に、そしてかすかながら獄中にもつたわってくる状況を、かなり力をこめて描いている。そして獄中獄外に共通するのは、指導者と大衆との関係は、どのようにあるのが現実的で有効であるかという、運動の基本的課題のひとつがすえられている点である。

農民組合再建のうごきは、山田春乃と谷川清吉とを軸として展開する。四年まえ、一九二八（昭和三）年の三・一五大検挙のおおりをうけて壊滅したS郡農民組合の、壊滅の組織内的原因の解明からはじまる。春乃は、

村で普通に生活してゐて、村の人達と不断の接触を保ち、ややもすれば足の浮きあがりがちな職業的運動家たちとの間に一つの媒介物となる。（中略）今後の運動の発展の大きな部分はさういふ存在の肩にかかつてゐる。（中略）壊滅した組織の内部の弱さの最大の環は、ほかならぬかかる媒介物そのものにあつた。

と考へ、組合再建のいとぐちをそこにもとめ、意志的に産婆となつて開業し村人に重宝がられている。谷川は、

たとへ一とかけらの土地でもいい、わがものといへる田圃を一生のうちこの手に持つてみたいといふ願ひ、このくらゐ強い烈しい百姓の願ひなんてものはほかにあるもんぢやない。（中略）当

時の組合の指導方針はこの百姓の要求を頭つからおさへつけたんだ。(中略)絶対に土地を買つちやいかんなんていふから、組合は共産主義だとかんとかいはれるんだ。

という判断をもっている。また素朴な現実主義者として「地主と妥協する時、彼はしんからそれを最良の手段と信じ、目前の利益を保証せず、犠牲者を出すだけに終るデモのたぐいを、愚かしいことの上上とした」から、東京から書記としてやってきて指導をしている若者たち——なかには学業なかばに退学して——の土着性のない非現実的思想や行動方針に反発していた。農耕に従事している谷川としてはとうぜん自作農問題を別とすれば、春乃と谷川とは組合の指導者のあり方・方針などを批判する思想的立場としては共通性をもっているといえる。このような二人を中心にS郡の農民組合の再建がもくろまれるのである。

ところが、いっぽうその農民組織再建までの空隙をねらって、かたがた第二回普選もからんで、土地の地主層出身でドイツ・ナチスの礼賛者松崎真次郎が、東京N大教授の肩書きをもって選挙に立候補し、農民興国会を組織して選挙地盤にしようとうごきはじめる。農民の組織を待望していた農民たちは、選挙とのからみやその思想の实体を問わずに、続々と組織されてゆく。松崎真次郎のたくみな戦術と雄弁によって、農民興国会はついに結成された。松崎の農民

心理につけいる術は巧妙である。

農民組合の諸君はなぜ失敗したか？農民生活の向上といふことを目ざしてあれほど闘った。当時はいかにも小作料が下り、生活も少しはらくになつたかも知れませんが、今はもとの李阿弥であり、組合は影も形もなくなつてしまつた。原因は彈圧にあるといふ、しかし彈圧に脆くも潰えてしまつたといふことがそもそもその根幹に於て薄弱なところのあつた証拠で、真に正しい、大衆を基礎とした運動ならば外部の力によつてどうにもなるわけのものではないのです。私の考へによれば、過去の農民組合は誤つた思想、精神に貫ぬかれてゐたのです。

あつまつた農民は「少くとも前半はよくわかつた。が後半、何々主義、何々精神といふような言葉がさかんに出だしてからはわからなかつた」のだが、そして現実問題として現に目のまえにある地主対小作の対立関係にもふれて「地主は地主であることをやめ、小作が小作であることをやめるほかはない」と断定しながら、なんの具体策も示していないのにもかかわらず、農民は、農民興国会がかつての農民組合の役割をはたしてくれるものだと思ひこみ、大量に組織される。

農民興国会にたいするかつての農民組合の指導者たちの態度は、まちまちであつた。松崎の偽瞞をみぬいて、それへの参加を峻拒

し、別組織をつくろうとして焦っている中村たち、ただ谷川と宮川とだけは、農民興国会を「農民組合にまで発展する、いや発展せしめずにはおかぬ」ものとしてとらえ、したがって興国会創立者のひとりにもなり、松崎の選挙運動員にもなっている。その真意を知らぬ、知っていても荒唐無稽の夢物語としかみない仲間の者たちに嘲罵されながら、谷川は興国会加入をその仲間たちに呼びかける。春

乃は谷川のような考えにまではわりきれていないが、農民にとって興国会が「悪徳な意図のままに彼らをひきずりまはし、彼等を売つてゐる」状態であることは認めないわけにゆかず、「おのれを清しとする潔癖な態度」では事態の解決にならないこと、したがって松崎一派から農民大衆を防衛しなければならないと考える。が、かの女の「貧しい持ち合せの公式は新しくつき当つた生きものであるかかる現実をとらへ、処理することに無力であることを今は悟るほかはないのだ。だが、旧組合指導部の意見のわかれる——興国会は思想団体が大衆団体か——という点では、中村たちが思想団体とみて、だから加盟するのをいさぎよしとしないというのにたいして、谷川や宮川とおなじく春乃も大衆団体とみるころまでかわつてくるのだ。そのように春乃をかえたのは、松崎の政見発表会でみた農民のほんとうの姿だった。旧組合の仲間のひとりで、興国会の一人・山野栄吉は応援弁士として登壇したが、その話の内容は、松崎と

はまったく関係のない電灯料定額制のごまかしの暴露であり、その話が聴衆である農民たちの破れるような拍手でむかえられた状況をみたからであった。そこには農民の生活者としての要求があらわな姿であられていた。

本来の彼自身が仮装した彼を突破し乗り越えてしまふのだ。そして聴衆も亦今日の演説会の性質を忘れて聴き入る。いふものも聴くものも、もはや松崎や農民興国会やそんなものはどうでもいい、彼らを演壇に立たせまたこの会場に集めたものはそれらとは全く別なるものだといふことがそこではじめてわかるのである。松崎や農民興国会にたぶらかされ、あるひは墮落したと見える大衆の精神こそは、じつは此上もなく健全なのだ。

この発見は春乃の思想や行動におおきく影響してくる。また谷川は、年貢と土地の貸借関係とをふくむ小作問題、不合理な産米検査制度のふたつの問題で、農民たちの相談相手となりながら、組合再建が念頭をはなれない。ちようどその頃、S郡の各村で年貢滞納者が続出してきた。地主たちや興国会の幹部たちは事情がわかるにつれて一驚しなければならなかった。年貢不納者たちが公然と「だつて今年には組合が出来、おれたちははまつたんだ。会費も納めたしよ。組合さはまつたからにや年貢はまけてもらはにゃ」といひだしていたからだ。農民には興国会はかつての農民組合であり、したがって

その幹部は年貢問題でいざこざがおこれは、とうぜん農民に有利なように解決してくれるはずだという認識があったのである。「大衆の一員」であり「大衆の自然成長的な動きにたいしてはじつに敏感」な谷川が、

小作人の大衆の基礎の上に一つの組織を形づくれば、その外観や名目は何であらうとも、その現在の指導者の、考へはまたどうであらうとも、それらにはかかはりなく、あるひは意識してそれを突破して、容易に進みうるものだとその事実を今こそはつきり知らされた。組織はまことにそれ自身の運命を持つ独立した生きものであるとの自覚にしんから到達した。

と感歎する事態にまで発展した。事態がここまで進展してくると、春乃は積極的に谷川と協力する立場をとるにいたる。谷川は農民興国会の幹事会の席上で、「本年度小作問題対策の件」と、まだ承諾していないが旧組合幹部の加盟を提案して他の幹事の全面的な反対をうける。かれはつきに小作人大会をひらいて年貢問題にひとつの方向をもとめようとするが、取締当局の干渉で用意した会場をうしなう。谷川も春乃もついに警察によばれる。作者は獄中でこの運動の経過を面会にきた春乃から伝え聞いた浅井の感想として、

谷川が動いたとするならば、それはあるポテンシャルな力に衝き動かされてのことであるのと言ふまでもない。そのポテンシャル

な力は、もちろん今度とてもなほポテンシャルである以上には出なかつたであらう。だがその力への信頼なくして何があらう。(中略) 今このやうな状態におかれてゐてその力の片鱗をでも垣間見ることができたといふのは大きな喜びであり、慰めであり、力であつた。事の挫折といふことなどは取るにも足らぬことと思はれるのであつた。

と考えさせることで、谷川たちの運動のしめくりとしている。

つきにかかげる作中人物たちの組織活動にたいする観察・判断・主張・批判は、この時期における作者島木の立場と思想を語っていないだろうか。

(1) 村々での運動の指導者は、実地農業の上に於ても農業の技術員などは後におくほどの腕を持つ、いはゆる篤農家であることが望ましい。(中略) さういふ指導者のあるところは必ず組織率が高かつた。——長く土地から離れてゐた春乃は、とくにそのことを感じ、自分自身先づすぐれた農人たる資格を得ようと心がけてゐた。

(2) かつて谷川は自分の左に、自分と対立する同じ指導者の一群を持つてゐた。彼によつてウルトラと理解され、事実多分にウルトラでもあつた主として知識階級出身の一群の青年たちであつた。

彼らは彼等の理論的貧しさと、実践上の未熟と、出身階級から来るものと、若さと、自らをそれほど大衆の生活に近づけては居らぬこと等のために、観念的に追求してゐるものが実際の行動の上を実を結ぶことはむしろまれであるといつてよかつた。この観念と実際との喰ひ違ひ、破れ目のところこそじつに谷川清吉が身をおく場所であつたのである。

- (3) 仮借せぬ厳正な精神はかつては行動に結びついて生きてゐたが、今は行動から遊離した風袋ふうたうと化してゐる。変化した情勢の下に於ては彼ら（旧組合幹部）は動き出さない。動き出せばポーズが崩れることを無意識のうちに知つてゐるからだ。名声も過去のものととなり、次第に孤立した存在になりつつあることも知らないで、昔ながらの歌を繰り返してゐる。それによつて依然聴衆をつなぎとめ得るかの錯覚に陥つてゐる。かくて道化た惨めな存在にまで落ちて行く。

(4) 日常の生活利害に結びついた具体的行動から離れ、何等かの思想的一致を少数の彼の目がねにかなつた農民に要求してかかり、そこに中心を築かうといふのであれば、その誤謬は余りにも明らかであつた。中心結成の過程を大衆団体と無関係に考へ、まづ何らかの方法で中心が成り、それが一方にあり他方に大衆団体があり、しかるのちその二つが結びつく、と考へてゐるかと思へる

ふしぶしなどは、幼稚であるといふほかはなかつた。

- (5) どんなにしても眼の前の困難は突き抜けて生きて行かにならん。だからわしらの運動はやはり三十四十になり、くらしの上でも責任を持つた者たちが中心とならなきやだめだ、青年だけに任せられんと、わしはふだんから始終言つてるんだ。

(6) 春乃に言はせれば、彼女は、彼女がさういふ思想体系の片鱗の中に知るに至つたその以前に於て、その出生に於て、貧農の娘だつた。彼女は自分の一家と周囲の生活を自分の眼で見えて来た。それは喜ばしからぬ状態にあつた。（中略）そしてその前後においてあたかも農民組合を知り、浅井信吉を知つたのである。それから彼女は学んだ。（中略）しかしその思想の出生を尋ねられるならば、彼女はあくまでも彼女自身の肉体の出生と切り離せぬものとしてそれをいふ。

(7) 百姓と聞いただけで、文章を読んで理解する彼等の能力など、何か非常に低いものだと思へてゐるものが、農民運動家自身のためにさへ、屢々見られるが、これはひどい間違ひなのだ。（中略）彼等は自分の生活の眼で読み、たとへ口に出して言はなくても、問題に対する自分の感想、意見といふものはそれぞれちゃんと腹の底に持つてゐる。

- (8) その年の五月十五日に起つた事件以後、（中略）無産者団体の

動きもしだいに活潑になつて来たらしく、(中略)春乃のところへも思ひがけないところから思ひがけない文書が送られて来たりました。春乃はそれを読んだ。感動がなかつたとはいへぬ。しかし何か縁遠い感じであつた。

ここには、島木のこの時点までの全体験についての総括的な見解・思想的立場が示されているといつてよからう。思想の現実的有効性のつよい強調、さらに運動の要諦としての大衆重視とともに、その英知に学ぶことの必要の提唱、そのためには大衆と生活をともにして、そこに根ざした思想こそが強靱であることの称揚、指導政党への一種のうとましきなど、あきらかに『獄』を描いた島木とはちがつた思想をみることができぬ。農民の現実生活の要求に依拠して、その生活をさまざまに規制する諸条件と柔軟な姿勢でとりくむ現実主義的改良家が、非転向をつらぬく理想的共產主義者像といれかわつて登場している。なるほど獄中に非転向を堅持する浅井信吉や石上虎吉が描かれてはいる。そして『獄』と同様に、そのふたりと転向者・吉岡、動揺する川合とが対比して描きだされてもいる。が、それは農民運動の再建を主題とするこの作品では、あきらかに傍流におしやられてしまつてゐる。とくにみのがすことのできないのは、谷川とくんで組合再建運動を推進した春乃の思想・行動が、非転向者・浅井によつて全面的に容認されている点である。この容

認は非転向者その操守のりっぱさにおいて評価するにとどまつていたのが、その非転向を絶対化することからぬけて、非転向者も思想的・行動的にかわりうるものとして相対化してとらえる段階にまで、島木の思想がうごいてきたことを意味するといつてよい。

非転向者をそうとらえることによつて、転向者もまたあらたな可能性をつかみうることを、つかまねばならぬことを暗示したのではない。それは転向・非転向にまつた関係のない谷川の肯定的な設定をみればあきらかである。かれは左翼理論を体得している人物ではない。しかし農民としての生活要求から行動する経験主義的な活動家である。にもかかわらずかれの思想・行動は春乃と同様に浅井によつて評価されている。そのうえ、かつての公式的な理論をそのまま墨守している中村は、谷川や春乃とともに行動することをいさぎよしとせず、袂をわかつて運動から身をひいた、そのことによつてその中村を島木は批判し否定している。ということは、転向・非転向の『獄』におけるようなぬきさしならぬ関係を、良心の苦惱の問題としてとりあげる裁きの文字から脱皮して、それはそれとして問題にしなから、それだけに固執しないで、転向者もまた、あらたな活動を開始しうる状況とそこに生きる思想を模索し、さぐりあてたということになるであらう。谷川設定の意味はそこにもとめられねばならない。その意味で谷川と春乃は、『生活の探求』の杉野駿介

の前身であるといえるであろう。「再建」から『生活の探求』へ展開しなければならなかった必然の脈絡は、そのようにたどることができるのである。

しかし、このような変化を島木にもたらしたのは、なんであったか。

註

⑮ 「あとがき」『全集』第四巻）五六五頁。

⑯ 大久保典夫『昭和文学史の構想と分析』（至文堂）六一頁。

3

一九三三（昭和八）年六月、つまり『獄』執筆の前年、共産党の代表的指導者であった佐野学・鍋山貞親が獄中から『共同被告同志に告ぐる書』^⑰によって転向を表明し、獄中獄外に深甚の衝撃をあたえたことは、あまりに有名である。これは転向声明といっても一国社会主義理論への転換であり、社会主義革命の全的放棄の宣言でなかったところに影響のおおきさ・複雑さの原因があった。

島木はすでにその五年まえに転向していたのだから、他の同志のように佐野・鍋山のこの声明を契機として転向したというのではない。しかし、この声明を『再建』と「転向者の一つの場合」の二作品のなかでとりあげて、描いているのはなぜか。執筆開始は『再建』

のほうがはやいが、これは中絶して、のちに書きおろしていて、しかもこの事件は作品の末尾に近いところででてくるので、事件をとりあつかったのは、「転向者の一つの場合」のほうがさきであったろうと推定される。「転向者の一つの場合」では、「真人会」という転向者更生世話機関の説明をするところで、

三年の夏の獄中の指導者のあるものによつて一つの理論が唱へられて以来、それがきつかけとなつて多数の転向者が続出した。と簡単にふれているだけで、「真人会」にかならずしも好感をもたない木村俊吉を描いて、それにひきつづいてこの説明があるので、それとの関連で島木がこの転向声明に共感の念をいだいたのではないかもしれないと推測させるにすぎない。しかし、『再建』では、かなり詳しく内容にもふれ、ストーリーの展開にある役割をはたすものとして位置づけられているので、問題にしたい。教誨師・乙竹は、囚人教化の一資料としてこの声明を浅井によませる。これは行刑当局の方針であったにちがいない。連鎖反応的に転向の続発することが期待されていたのだ。

作者はこの文書の主張してある政治的意見に対して作者自身の積極的な見解といふものは別に持つてはゐない。賛成でも不賛成でもない。（中略）ただここに浅井信吉といふ一人の人物がある。

これは作者が生み出した人間だが、一度生れた以上はもう作者の

意のままにならぬ彼自身の運命を持つてゐる。さて浅井は今、彼が身を委ねて来た運動の指導理論に関して実に重大な意味を持つ文書に接した。これに対する浅井の態度はどうであるか？（中略）彼自身の独自性で動いて行く浅井の発展に従はねばならぬ。

浅井がどのやうに発展して行くか、作者の予断は許されぬのである。

しかし島木はこの文書が浅井にもたらした「あらゆる影響」、かれが「消極的に或ひは積極的に示した反応」の追求を断念する。理由は、この文書は社会に公表されているが、この文書のもつ思想・立場にたいする浅井の「一切の感想、批判、意見」を開陳して論争を作品のなかで展開したとき、その部分まで公表の自由があるかどうか保障のかぎりではないからだという。

この点の浅井がつひに曖昧なまま終らなければならぬのは、この物語の大きな欠陥である。作者にはかつて「傷だらけの文学」の説があつたが、今この物語がさういふ文学の一つとなつた。

浅井はまた開いて、とくに刺戟された箇所を繰り返し読んで行つた。従来の彼等の運動方針の基礎的部分に対する指導者自身による駁撃、その変革的意見といふものは何も新しい、はじめてのものではなかつた。しかしそのことは何も衝動的でないといふこと

ではなかつた。読みながら湧き上つて来る実にいろいろな感想、意見を整理し、統一するよりは、まづ書かれてゐることを正確に理解し、しつかりと記憶のなかに叩き込まなければならなかつた。側においていつも見たい時に見れるといふやうなものではないからだ。「目に見えたウソを以て無責任な煽動をやつてゐる」といふやうな文字がチカチカと眼を衝いた。

そのほかには、浅井だけではなく川合広志も石上虎吉もつぎつぎに教誨師によびだされて、この文書をよまされてゐるらしい様子と、「三二年の秋の満州事変があつて以後の時期に中沢、東条（佐野・鍋山）によつて新しくそれが唱へられた、といふところに特別の意義があつた」とか、「ある点は脆いが、ある点は急所を衝いてゐないとはいへぬ」とかの断片的な感想が散見するにすぎない。そして心身ともに衰弱してはてていた川合広志にとつて、この声明が「最後の打撃」となつて、死にいたるという程度のふれかたでおわつてゐる。島木とこの声明との関係は、そのもの自体がはっきりと表面にあらわれるのは、この程度にすぎないが、『再建』一篇を注意してみると、この声明について「何も新しい、はじめてのものではなかつた」「急所を衝いてゐないとはいへぬ」といふような歯ぎれのわるい否定と肯定は、そういういい方をしていただけに、かえつて島木の本音がよじれたかたちで表白されてゐるともいえる。だから

ら、島木が「労農派はもとより、佐野・鍋山とも自己を区別するものとして、しかも日本の革命運動を現実主義的に批判」したという説があるにもかかわらず、表面に散見するこれらの表現だけでおわっているだろうかという疑問を、うちけすことができない。そこで作品にあらわれている島木思想を『共同被告同志に告ぐる書』との関係で検討してみたい。

「日本民族の運命と労働階級のそれとの関連、また日本プロレタリア前衛とコミンタールとの関係について」「長い沈思の末、我々(我々)従来主張と行動とにおける重要な変更を決意するに至つた」というまえおきをもち、「我々が茲に問題を提示したことは経歴短き個別党員の単なる心境変化と全然その出発を異にし、「我々の見解は、我々の口を通して出た日本のプロレタリアートの自覚分子の意見だ」という確信を固守する」とかなり高姿勢で結ばれているこの共同声明のあたえた衝撃は、それが共産党の代表者とみなされていたものの所信表明であつただけに、今日からは想像もおよばない、激甚な影響をあたえたのであろう。

佐野・鍋山の転向は弾圧に対しての単なる屈服としてではなく、新たな積極的原理に基づくプロレタリア革命運動の組みかえという形をとっている。それは特に「現在」の党あるいはコミンテルンの墮落に対する歴史的批判といふ形をとり、かつての理念の今

日的継承として新たな運動の開始を主張する。この「積極的原理」の発見に基づく運動の持続といふ姿勢が、過剰な「脱落」と「裏切り」の自意識に苛ませることなく、多くの転向者を噴出せしめた内からの契機だつた。

という指摘があるが、まさにそのとおりであつたにちがいない。『獄』を執筆して、あれほど自己の転向にこだわりつづけていた島木であっても、この共同声明以後、ここに指摘されるような転向者の一般的な思想的・心情的反応とまったく軌を一にしているとまではいえないにしても、『再建』執筆の過程において、この声明の影響が、陰に陽に作用したであろうというのが私見である。

浅井が入獄前の体験としてもつA青年の書いた「素朴な、誰かに向つて語るやうに書かれた文章」が、「ひどく歪曲され」「誇張されて」動員数一五〇が五〇〇となり、検束者皆無なのが、二十数名となり、「この不当に抗議せよ」と結ばれたS新聞のあり方への批判は、共同声明の「目に見えたウソを以て無責任な煽動をやつてゐる」という非難がなくてはたして可能だつたらうか。「深刻化してゆく農民闘争の権威ある指導も、党に依つては行はれなかつた」という批判がなくて、谷川清吉の設定・創造ができたのだろうか。あるいは、

我々は日本共産党がコミンタールの指示に従ひ、外観だけ革命的

にして實質上有害な君主制廃止のスローガンをかゝげたのは根本的な誤謬であつたことを認める。(中略) 皇室を民族的統一の中心と感ずる社会的感情が勤労者大衆の胸底にある。我々はこの事実を有りの儘に把握する必要がある。⁵⁰

という、いわば「天皇制打倒」をスローガンとしてきた共產党の存立の基礎をゆるがすような見解がでてきてはじめて、従来の公式的な固定観念の呪縛から解放され、もっと現実に即して柔軟に思考する自由を転向者たちはもちえたのではなからうか。それゆえに島木もまたあらためて勤労者大衆、とくに農民大衆を「有りの儘に把握」しようと志向したのではなかつたか。さらには、

日本の左翼的労働者運動が、党と言はず、組合と言はず、コミンターンの諸関係から断然分離し、迫り来る社会的変化に適應すべく、新たな基準に於てラヂカルに再編制せられねばならぬことを主張する。⁵¹

という提案と、一説に「人民戦線戦術の具体化」といわれ、あるいは「農民委員会運動」との関連が推測される、谷川・春乃たちの農民興国会への加盟における「母屋ごとそっくりかつさらつてしまふ」という奔放な発想とは無関係だろうか。このように共同声明の思想と島木の創作との関係をとらえることができると思えば、これらの接続関係を前提として、さらに「肝腎の労働者大衆の関心から

離れ、欠くべからざるプロレタリア的自己批判は抛擲され、純真の青年同志や労働者黨員は大衆的闘争の中に訓練せられない⁵²」とする共同声明の現状批判は、さきに島木を反映するものとしてかかげた(2)「観念と実際との喰ひ違ひ」、(3)「変化した情勢」に対応できぬ指導者層、(4)「大衆団体」軽視の運動論、(5)生活をせおつたものの運動の着実さ、(7)大衆の英知への信頼の欠如などの批判や意見としてうけつがれ、進展させられたものとみることができ。そして島木にとって絶対であつた党にたいして(8)「縁遠い感じ」をいだしながら、ともかく自力で状況を突破しなければならず、そのためには(1)「農人」として徹底すること、そのなかで(6)生活にねざした思想を形成することが、結論的にかれのプログラムにのぼつてきたのではなからうか。そして『再建』の末尾で、「身の程を知れ」「汝自身を知れ」というまったく個人的な求道の姿勢に収斂されるころまでくれば、『生活の探求』の杉野駿介の人生はあらかじめ想像するにたたくないのである。すでに十五年戦争の幕はきつておとされ、この共同声明のでた年だけを見ても、小林多喜二虐殺、国際連盟脱退、京大・滝川事件、石坂洋次郎の『若い人』が不敬罪・軍人誣告罪で起訴され、河上肇引退声明、神兵隊のクーデター計画発覚、野呂栄太郎検挙(翌年獄死)など、あわたたしく血なまぐさい時代の到来はおおうべくもない。そして島木が『再建』をだした一

九三七（昭和十二）年には中国との全面戦争へ日本が突入したのであり、それがただちに発禁になるという時代であった。島木にとつて共同声明は、微妙な思想的変化を徐々にもたらす契機となつたばかりでなく、他人事としてよみずてるわけにはゆかぬ時代の状況が、かれの身辺にもさしこまれていたことをものがたっているといえよう。この声明と島木とのあいだにはながいあいだにわたる対決があり、それによって島木の心情・思想に変化があらわれてきたのである。かれ自身、自分の作家経歴を前・後期にわけて、『生活の探求』を「あとの時期の最初にあたる」作品としているのだから、『再建』が後期の作品との異質性をはらんでいたことを認めていたといえるであらう。

註

- ①⑦ 司法省刑事局『思想研究資料』第三十六輯、三三〇頁。
 ①⑧ 三田村四郎、風聞文吉、田中清吉など（角家文雄『昭和言論史』学陽書房）六二頁。
 ①⑨ 平野謙「島木健作」（青木書店『現代の作家』所収）一六六頁。
 ②⑩ 註①におなじ、三三〇頁。
 ②⑪ 同前、三四二頁。
 ②⑫ 思想の科学研究会編『転向』上（平凡社）一六七頁。

②⑬ 註①におなじ、三三二頁。

②⑭ 同前、三三〇頁。

②⑮ 同前、三三六～七頁。

②⑯ 同前、三三三～四頁。

②⑰ 平野謙「昭和文学私論」（毎日新聞）昭和四十六年十月十八日）

②⑱ 小笠原克「島木健作」（明治書院）一三四頁。

②⑲ 註①におなじ、三三一頁。

③⑰ 『生活の探求』について」（改造社『新日本文学全集』第十九卷）四八九頁。

4

『再建』が一九三七（昭和十二）年六月に発禁禁止になってからわずか四ヶ月後、十月に『生活の探求』を刊行し、翌年その続篇を世に問うている。この作品を書いた頃の心境を一九四一（昭和十六）年に、つぎのように回想している。

転向といふことが、単にある政治上の主義や、政治的な組織からの離脱といふやうなことではなく、さらに深い人間の精神の問題であること、それは求道の過程そのものであること、その意味においてそれは一生の事であること、を、真に強く自覚したのは、

「生活の探求」においてであつた。(中略) 転向の問題を広々とした精神の世界へ放ちやつて、求道の一つの過程として見る事ができるやうになつたときに、私は暗さは暗さとしてそのなかに、ある落ち着きを感じたのであつた。(中略) 活潑にふるまつてゐるやうな時にも私はつひに独房の心から脱れることはできぬやうだ。誇張でなく私は一日として死について思はぬ日はない。死ぬべきであつたものが生きてゐるとの感がふかい。「今日の日もどうにかかくは生きた。神よ、みこころのままになしたまへ。」私は何の信者でもないが、つまるところはさういふところに日常の安心を得て生きてゐるものやうだ。^⑧

これは『生活の探求』執筆当時の心境に、さらにこの一文のかかれた時期の心境がオーバーラップしてゐるやうだ。これを書いた三年後の一九四四(昭和十九)年の、作品『赤蛙』の運命諦視の心境にあいつうずるものがよみとれるからである。が、「求道の過程」——つまり安心立命をもとめる模索の過程が、この作品の具体的展開そのものにほかならなかつたといふことは、注目しなければならぬといふ。

病いにたおれ、保養のために帰省している大学生・杉野駿介は、三ヶ月の郷里滞在のあいだに学業継続の心境に変化がおこつてく

る。かれが肉体労働に身を投じようと志すのは健康回復だけが理由ではなくて、「心身がある一つの対象に向つて統一された状態にあることを、張り切つた力の感じ、充実感」をもとめる心境になつてきたからであつた。「脱出の道のない、泥沼のやうな観念の世界にはまりこんで、脱け道がないといふことのなにかへつて陶酔してゐたやうな過去」への反省が根底にあり、さらには「他人の生きた経験をそのまま抛り所とするわけにはいかぬ、先づ自分自らがほんたうに社会を生きて見なければならぬ」という決意がかれをつよくとらえてきたからであつた。苦学してゐるとはいつても、みずからの力で全生活をせおつてゐる労働者ではない、そういう大学生の観念的・思弁的な生活にたいする自己反省として、人生を体あたりで生きてみようとする、自己に試練を課せようとする駿介のいきごんだ姿勢をうかがうことができる。そしてその生きる「社会」としてかれがもとめるのは、「何か生活的なもの、実質的なもの、中身のぎつしり詰つてゐるもの、生産的なもの、建設的なもの、上附うけつかずにつきり地に足のついた」社会であり、そうなればかれの故郷の農村社会がそういう条件をそなえたものとして眼に映ってくるのは自然であつたらう。かれは学業を放棄して農民として生きる決心をかためる。『再建』の春乃が篤農家にならうと考へたのは、村民との連携を強化し運動を促進するためであつたのたいして、駿介がま

まったく自分個人の間人形成という意味あいでは帰農しようとするところに、両作品の性格のちがいがすでにかいまみられる。しかし、実際にやってみると、農村の仕事はインテリのかれにとって、そうしたやすいことではなかった。たとえば井戸掘りや麦刈りのような労働においても、かれはたえず自分の肉体の非力と経験のなさをおもいしらされる。農民にとって、ながい年月のあいだにつちかっていた経験による知恵が、いかに貴重なものであるか、かれはことごとく驚歎させられる。「六十五歳の老父の、力に満ちながらゆとりのあるものごし」や「足の踏まへ方や腕の張り方や、その一挙一動が精彩を放ち、感動をもつて」眺められ畏敬の念をいだかされる。農事には肉体的訓練とつかさねられた技術のながい歴史があり、一朝一夕にできあがらないものがあるだけに、駿介がかんたんに学びとれるものでないことが、はっきりしてくるにつれて、かれは本腰をいれて農民に徹しようという、ひたむきな精進をはじめるのである。

しかし、そういうかれの生きかたにたいして、辛辣な批評者があらわれる。隣村出身の先輩で、東京遊学中、左翼運動に関係したらしいが、それから脱落したのか、いまは実家に帰っている志村克彦がそれである。これからはじめようとしている農民としての生活から「僕にとつてどういう新しいものが生まれるか」「創造と発展が

そこから期待出来る」とする駿介にたいして、志村はにべもなく「生れはしないだらうね、別に新しいものは」と一蹴するばかりでなく、「一種の農民主義だ。土に還れ主義だ。母なる大地賛美だ」と極論し、運動からはなれて帰農したかつての左翼の先例をふまえて「すでに試験済み」ではないかという。駿介はその先例は帰農が帰着点であるのにたいして、自分のそれは出発点だといって抗弁するが、

インテリにとつては今の時代は辛い時代だよ。その辛さに君などは負けたのさ。しかもその辛さをほんのちよつびり舌の先で嘗めたいふだけでさ。君は逃げ出したんだ。そしてそれを合理化するために、インテリとして生きるよりも、農民や労働者として生きるの方が、ただそれだけで本質的に高く立派な道であるといふ考へを人にも自分にも押しつけてゐるんだ。さういふ自分に都合のいいところだけ、昔の左翼の機械的な考へをこつそり拝借して来てさ。インテリ一般、労働者農民一般を何か対比して見て優劣を云ふなんてことは今時はやらんし、バカげたことだよ。

と、志村にたかびしやに断定され、駿介は自分の真意がわかってもらえないもどかしさとともに、志村の口調に、罵倒の対象のなかには志村自身もふくまれていような自嘲をかんじる。ここには島木の転換の方向があきらかに示されている。志村の口をついてでてく

る批判は、『再建』の中村の理論の延長であって、すでに島木にとつては、のりこえられていた立場であり、駿介の真意とはかみあわないことで、その観念性を露呈し、かえって駿介の帰農の意味が、そのような批判ではゆるぎもしい牢固とした確信をもって把握されていることを、うきばりにする役割をはたしている。

駿介は農業労働に専心することによって自己改造をはかり、とくにインテリの観念性や非実践性の克服をめざして自己再建の道を歩く。そして最後に自己の生きる道と社会的な人間として生きる道との統一をも志向し、つぎつぎに村の問題にとりくむようになる。

村にはさまざまな問題が山積していた。煙草畑の増段要求、煙草の乾燥と検査における不合理、医療設備の不備、地主・小作間の土地貸借と年貢の問題、青年への啓蒙運動などにたいして果敢に挑戦していった。そしてその熱意と誠実と実行力とは、多少のいざこざはあっても、結局、これらの難問題をみごとに解決してゆくのである。一例として小作問題についての駿介の対処のしかたをみてみよう。地主・伊貝の土地を広岡と畑浦がとなりあって耕作していたが、一段歩一石三斗の年貢にたえかねて、畑浦はその小作地を投げだしてしまふ。それをあわせて耕作したいので伊貝に折衝してほしいというのが、広岡の駿介への依頼であった。調べてみるとその土

地は一石しかとれないのに年貢は一石三斗という不合理な契約である。その不利を広岡は三毛作、つまり麦・煙草・米の連作でどうにか穴うめしている。駿介は常識はずれの年貢と実収との差に義憤をかんじて交渉にのりだす。が、地主の壁はあつて、駿介は広岡とはりあってまた耕作を希望しはじめた畑浦を説得して、広岡との共同態勢をとらせ、土地の再獲得と年貢ひきさげの交渉をつづける。広岡と畑浦をばらばらに対立させておいて、従来どおりの条件をまもらうともくろんでいた伊貝は、頑として応じない。

かうまでものの道理が通じなくては何を云つたとて無駄な気がした。相手の理と情とに訴へるといふこともはや不可能なやうな気がした。(中略) 駿介はいかにしても自分の言葉を相手に通ぜしめたかつた。職業、身分、階級の如何を問はず、あらゆる人間に通じねばならぬ筈の道理を、一つささやかな真実を、伊貝にも亦通ぜしめたかつた。(中略) この熱望と必要とは、若い彼をして尚も怒らしめなかつた。激情の一步手前まで衝きやられてゐる彼を尚も忍耐強からしめた。誠意が彼の面に溢れ、彼の声は低くさへなつた。

こういうかれの熱望と誠意に、ついに伊貝もおれて、たがいに譲歩して年貢七斗で解決した。こういふねばりづよい交渉には、あらかじめ駿介が相談した父・駒平の「理を説くよりや、情に訴へること

ちや。どこどこまでも下手に出て歎願するんじや」というながい人生経験からくる教訓がおおきなささえになっていた。

物の道理を説けば必ず人に開かれるものとは限りやせん。聞かれる時もありや、聞かれん時もある。聞かれんのはこつちのせみばかりぢやないぞ。それをどうしてすぐに負けだと云ふんや。そななことにお構ひなく正しい物の道理といふもなアいつだつてあらうが。たとへ今聞かれんからとて、おのれの云ふことがその理に合つとりさへすりや、いつかはきつと聞かれる時が来べき筈のもんぢやあらうが。さう思はにや、何も出来やせんぞ。聞き入れられん時にや、黙つて引つ込む。用もない争ひはせん、まだその時は来んのぢやよつて。

駿介はこの「父のいふことは正しい」とうけとめて交渉にあつた。そして経過は父のいうとおりであつた。駿介はいよいよふかく「ちゃんと自分の始末のついた人間」である父親に傾倒し、父をとおして農民の愚鈍らしくみえる所業の底にひそんでいる、ながい生活の歴史が生んだ「工夫や発明や智慧や創意」を発見して感動する。駿介の誠実、熱意、行動力——これは非難のしようのない美德をそなえた好青年というほかはないが、それだけに駿介によつて、かれの住む農村が、ひいては日本が、どのように認識されていたかという問題をぬきにはならないだろう。しかし、おおくの見解

は駿介の内面に集中している。

このやうにして進でゆく駿介の謙虚な生活の探求、全身をうちこむに足る生活の探求がこの著作のモチーフである。これほど謙遜などところからの出発はない。作者もここで全然新しくやり直さうと気構へてゐる。(中略)通俗小説に陥らず、また安易な傾向小説にも走らないこのやうな小説が、兎も角この困難な時代に生れ出たといふことを想ふとき、当然生れいづべきものが生れ出たといふ必然性とともに、これを生むにいたるまでの容易ならざる作者の心的準備を感じないわけにはゆかない。

という唐木順三の批評や、さらには、

転向とは或る立場から立場への移行でなく、単なる思想問題でもなく、人間として根本から生れ変らうとする人間的問題でなければならぬ。「生活の探求」の根本にある覚悟はこれである。

という亀井勝一郎の解釈は、杉野駿介の生活の探求の方向なり方法なりが、島木自身のそれとしてあつかわれてゐるわけであつて、この作品が島木にとつて「求道」の書という性格をもっている以上、否定すべき意見ではないが、この作品の焦点をその一点だけにしほすることは問題であろう。なぜなら、この作品は「求道」の書であることとふかくかわつて、島木の日本再認識の書という一面をもっているからである。再認識された農村のなかでの求道、生活の探求

にはかならないからだ。

「自己変革はまづ生産に参加する労働の過程」にあるとし、そのためにはまず「習俗に従うことで自らを人々に同化させねばならぬ」と考える駿介は、駒平にかわってできるだけ農作業に従事するが、いたるところであたらしい事実を発見し感動している。もちろん、農民のぬげがけ根性やことなかれ主義への腹だたしい批判はもちながら、それをうわまわって感服し共感することがおおいのだ。

村人に相談をもちかけられるようになったとき、

自分に対する農民の態度から、駿介はある強い感動を受けた。そしてそれはすべての障害に打ち克たうとする勇気を彼に与へるものであつた。此頃の彼は、敢て珍らしからぬ「ものの道理」が、実生活のなかで、一つ一つ確認されて行くのを見るととき最も感動し、新鮮な喜びを感じるのであつた。村の人達が、生活の利害に關してそんなにも敏感に反応するといふことは、軽侮の心を起さしむるところか、駿介に美しく見えた。

こういふ農村における合理主義のいささかの根づきと対人關係におけるよるこびばかりではない。かれは自然ともふかくかかわって喜びを獲得してゆく。

駿介は最初の力強い一鍬を田の中に入れた。黒い稲株が打ち下す鍬の先に掘り起され、白つぼく乾いてゐるやうな土の表面と、真

黒な湿りを持つた下の方とが、ムクムクと反転して行くのを見ると、彼は新鮮な喜びを感じた。その喜びは色々な要素から成り立つてゐた。子供の時、泥にまみれて遊ぶことが特別な歡喜であつた。(中略)少年の日の喜びが再び胸に帰つて来るのは、つまりはその両者の間に共通するものがあるからだと思つた。自然から汲み出す、あるひは自然と一つになる喜び、原始に惹かれるころには共通なものがあつた。

あるいは、

芽生えた苗は朝毎にその成長が眼に見えた。(中略)芽は、宝玉に比較される性質の美しさではない所に、そのものの本来の美しさがあつた。彼は取穫とは又違ふ喜びを始めて知つた。この喜びは肉体の隅々をまで満たす、全身的な喜びであつた。

このように農作業はかれに自然への驚異の眼をみひらかせてゆく。この農民への親愛と自然への感動——農業への愛着を底辺として、かれの関心は村の「習俗」、村の共同体としての伝統にたいする認識をふかめてゆく。都会にでていた青年が、ややもすれば輕蔑しがちな村の習慣・行事へも同化を示すようになる。昔からのしきたりとしてある道路修理の協同作業や田にひく水の当番管理によるこんで参加するばかりでなく、村の祭りにもいままでになくつよい関心をもつ。秋ともなれば、大師、地の神、山の神、金毘羅、牛の神、

毘沙門、八幡とさまざまな祭りが村ではとりおこなわれる。根本的には「農民の生き死にかかわる重大問題の解決者が人力以上のものに求められ」るからだが、ふだんは「鋤を取つて耕す、といふ仕事の形態そのものは単純であるが、農業全体の過程においては、実に複雑多端に他の人々と相互関係に入り組んでゐる。さういふ彼等の生活はおのずから社交の機会を多く求める」し、だから「祭は又慰安であり娯楽」なのだ。駿介は「素直にそのなかへはいつて行き、唄はなくても踊らなくても、人々が楽しんでゐるものを自分も一緒に楽しむことが出来るやうに」なるのである。

このような農村の現実との駿介のかかりあひは、農民や農村の封建的不合理的な精神や実態をてらしだす一面をもちながら、結局それらをつつみこんで、駿介にとっては、かれ流の生き方によってかえることのできる農民、農村社会としてとらえられている。この長篇をつうじて、駿介のどうすることもできなかったのは、煙草の毒害と父親の不慮の死くらいなものであって、ほかの諸問題は多少の曲折はあつても、すべてかれの誠意と実行力によって、まえばよりはよい状態につくりかえられる結果になつてゐる。かれが伊貝にいった「どうにかして円満な話合いのうちに、双方が満足する結果を得たい」というのが、この一篇をつらぬく駿介の生き方の基調であつたのだ。義理・人情の世界における処世となんらかわるところはな

い。あらゆる問題がこの心構えでとりくまれている。そしてかれの善意はかならずむくいられる。誠意をもってことにあたれば、かならず目的を達しようという確信でかれは行動できたのである。ということは、駿介を中軸とする村民相互の善意にみちた譲歩・協調が、この農村のよりよいあり方を招来する要因としてとらえられているということでもある。おかれている条件の範囲内しか駿介は行動していないから、かれがなにか行動しているということ、それに全力を傾倒しているということ自体に、満足をみいだしているとかおもえない場面さえでてくるのだ。だから駿介が真摯であればあるほど、農村の現実にたいする批判はうしなわれてしまふ結果になつたのだ。それはさらに農村内部における諸関係の本質的な姿をみうしなわせ、また農村と社会全体との関係も見おとす結果を招いている。いわば現状肯定の上になつた若干の修正と協調という環境順応主義の方向におちいらざるをえなかつたのである。

島木がこのような方向をたどるにいたつた過程に、ふたつの問題の介在が推測される。そのひとつは、杉野駿介を形象化するにあつて、その原型としてふたりの実在人物があつたのではないかということだ。紀行文「東旭川村にて」²⁸に登場するMという人物がそのひとりである。この文章は一九三八（昭和十三）年の『続生活の探求』完成後の東北・北海道旅行に取材したものが、島木にとって

Mは「十五年来の友人であり、今度は三年ぶりで逢った」というのであるから、このMと駿介との関係を想定してもさしつかえないであろう。このMは「東大出の法学士」であるが、大学をでるとすぐ村にかえり、「自分で鋏をとり、冷害による凶作の惨をつぶさになめもした」し、さらに「暑さ寒さの何年かを冬は流水の流れに寄り添って送った」こともあるという。これは農業のみならず漁業の体験もあるということなのか、思想犯として刑務所ぐらしを体験したということなのか、判然としないが、わたしは後者であろうと推定する。島木はこういうMの心境を「彼は自分につぐなはねばならぬものがあるとすれば、それは口舌にはよらず行動によつてでなければならぬことをひしとばかり感じたのであつたらう」とおしはかっている。「もはや昔のいはゆる闘士ではない」「人々と共に泣き笑ひもする」という生活によって「この平野の人々との間のつながりはさうして深く緊密なものになつて行つた」ともみている。村人と語りあうMは島木を「惚れ惚れさせ」「深く心に通じてゐるものがあり、愛情も沁みるおもひ」をいだかせる人物である。島木のふかい親近感をみると、Mと駿介のイメージに共通するものがあるのもとうぜんではなからうか。もうひとりとは、紀行文「男鹿半島」^⑤にてでてくるMである。「私の友人のM君の苦悩は大きかった。彼は新しい時代の思想に背を向けて行くことの出来ぬ人であった。彼は没

落してゆくものが没落せねばならぬ道理を知つてゐた。彼は我家を犠牲にしてもこの道理に忠実であらうとした」「かつて彼を捉へた思想と、その思想に基づいた行動とについて私は知つてゐる」「自家の経営に精を出し、さらに公の、村全般の仕事にも積極的に関与してゐる」というふうには描かれているこのMもまた、駿介のイメージとかなる部分をもっている。このふたりのMという実在人物と島木とのふかい交流の体験が、直接的なモデルとはいえないまでも、駿介を形象化してゆくときに、なにほどの牽引力としてはたらいたのではないかという推測である。戦時下における知識人の生きる可能性の創出にあたって、すでに実在していた人物の転身がモデルとして採取され、駿介の現実認識や生きかたを規制するようにはたらし、したがってそれに都合のよいように農村の現実がつくられたというのが、この作品の創作過程ではなかつたかとおもう。

推測の第二は、島木の描く駿介が農村の日常生活や技術や習俗へ接近する、そのしかた、そのうけとめかたに、民俗学、とくに柳田国男の思想と方法の影響があるのではないかということである。前述の村祭についての語り口、その意味づけ、あるいは「男鹿半島」^⑥に示されている方言「ガッチャキ」「ナマハゲ」^⑦などへの関心やその語源詮索の方法にも島木と民俗学との接触を想像させるものがある。もしこの推測どおりであるとすれば、島木は当時ようやく一般

に流布されはじめていた柳田民俗学の成果とのあいによって、従来の階級史観による現実認識から伝承史観によるそれへの道をきりひらいたという推定もなりたつであろう。もっといえば、民俗学の思想と方法が島木の内部で階級の社会認識の視点を解消させ、駿介の造型の方向を決定したという側面があったのではなからうか。

島木の自己再建は、自己救済に重点がかかりすぎたために、日本の現実を自己の対決の対象として文学のなかにとりこむのではなく、たんなる背景として遠ざけることによって可能になったというべきであろう。そこには自己との求道的なたたかいはあったとしても、ほんとうに文学のなかでたたかわねばならない対象としての社会的現実存在していないのだ。したがって、この作品に農本主義³³をみることは賛同できない。たとえ加藤完治との接触の事実があったとしても、そして作中にそれをおもわせる「国と社会にとつて重要な農村の生産力がなおざりにされてゐるのを救ふ」というような表現が見えるにしても、この作品では農業は駿介の自己救済の手段以上にはなっていないからだ。一九三七（昭和十二）年という、政治・社会的にも文学史的にも昭和のターニング・ポイントとなった時期に、このような主観的・観念的な自己救済の作品があらわれたということは、まことに象徴的であったといわねばならな

い。文学の日本的現実への埋没であり、たたかひの放棄であったといえるからである。この年の徳永直の『八年制』にはまだささやかながらも時代にたいする抵抗があった。

島木の文学における転向は「再建」に端を発し、『生活の探求』で完了したとみることが出来る。今なお痕跡をとどめる「独房の心」が「死」をおもい、「神よ、みこころのままになしたまへ」と祈願し、感謝するところまでくれば、それは一切の社会的なたたかひと絶縁したことを意味するはずである。『再建』の谷川や春乃ほどの農村に密着した現実主義もみることができなくなってしまう。林房雄が「私はまだ転向の中途にある。神々よ。わが遅き歩みを護り給へ！」³⁴といったのと、きわめて近い心境にあったといえる。こうなれば、かれは『礎』『赤蛙』への道を歩いてゆくほかなかったのである。

註

① 『生活の探求』について（改造社『新日本文学全集』十九卷）四九〇頁。

② 「島木健作」（筑摩書房『唐木順三全集』第一卷）四四四頁。

③ 「杉野駿介」（文芸春秋新社『知識人の肖像』）一三三頁。

④ 『全集』第十四卷、一五二頁。

⑤ 同前、一三五頁。

③⑥ 同前、一三九頁。

③⑦ 同前、一四六頁。

③⑧ 思想の科学編『転向』上、(平凡社)二二三頁。

③⑨ 岡田耕作「加藤完治の農民教育思想」(『思想の科学』昭和三十一年六月号)

④⑩ 『転向に就いて』(湘風会版)六七頁。

(七二・八・三〇)